

話すこと [やり取り] を通じた主体的に学習に取り組む
態度の育成を目指した実践

2021

久松 功周

広島大学附属中・高等学校
「中等教育研究紀要」第68号別刷

話すこと [やり取り] を通じた 主体的に学習に取り組む態度の育成を目指した実践

久松 功 周

本実践では中学校 3 年生を対象として話すこと [やり取り] を通じた主体的に学習に取り組む態度の育成を目指した指導を行った。指導要領などの文献調査から、「主体的に学習に取り組んでいる状態」を「①課題や価値観の創造、つまり自らの学習の方向性の認識、②方向性にしがった能力の習得と活用、③方向性にしがった、パフォーマンスの振り返り、によるサイクルを生徒自身で循環させられている状態」と定義し実践を行った。振り返りシートを活用することで、「主体的に学習に取り組む態度」の育成に効果が見られた一方で、今後整理を要する課題が浮き彫りになった。

1. 本稿のねらい

平成 29 年改訂学習指導要領 (2017)¹⁾ において、各教科等の目標及び内容が、育成を目指す資質・能力の三つの柱に沿って再整理された。それに伴って「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料中学校外国語科 (2020)²⁾ にもあるように、評価の観点が従来の「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」、「外国語表現の能力」、「外国語理解の能力」、「言語や文化についての知識・理解」の 4 観点から、各教科共通の観点である「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の 3 観点で行われることとなった。この変化について特筆すべきは、評価の対象、すなわち指導のゴールが「英語に関わる学力を身に付けているかどうか＝教科固有の学力の習得」のみならず、「英語に関わる学力を運用することを通じて、英語に限らない普遍的な学力を身に付けているかどうか＝教科固有の学力の活用を手段とした、汎用的な学力の習得」をも含めたものへと変わったことであると言える。この学力観の枠組みの変化に伴って、教師の指導観、生徒の学習観も資質・能力の三つの柱に向けたものへと変わっていくはずであるが、教育現場において十分に理解が得られているとは言い難い。そこで本稿では三つの柱のうち「主体的に学習に取り組む態度」に焦点を当て、今回の改訂から導入された話すこと [やり取り] の領域の指導を通じた「主体的に学習に取り組む態度」の育成の実践を報告し、その反省を通じて今後への示唆を記したい。

2. 主体的に学習に取り組む態度とは

平成 29 年改訂中学校学習指導要領解説外国語編において、「学びに向かう力・人間性等」に関わる目標は「外国語の背景にある文化に対する理解を深め、聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う」となっている。それを踏まえて、「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料中学校外国語科では、「学びに向かう力・人間性等」には観点別学習状況の評価を通じて見取ることができる部分と、こうした評価になじまないため個人内評価を通じて見取る部分があるとし、前者を「主体的に学習に取り組む態度」とした上で、これについて「知識及び技能を習得したり、思考力・判断力・表現力等を身に付けたりするために、自らの学習状況を把握し、学習の進め方について試行錯誤するなど自らの学習を調整しながら、学ぼうとしているかどうかという意思的な側面を評価することが重要である」としており、具体的には①知識及び技能を獲得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたりすることに向けた粘り強い取り組みを行うおうとしている側面と、②①の粘り強い取り組みを行う中で、自らの学習を調整しようとする側面の二つに分けている。本実践では以上を踏まえた上で、実践に落とし込んでくために、指導要領に書かれた社会背景を基に、著者なりにより具体的に定義することを試みた。

3. 主体的に学習に取り組む態度の考察

「主体的に学習に取り組む態度」をより具体的に理解するために、指導要領及び OECD より発表されている資料⁵⁾に載せられている社会的背景から、著者なりに主体的に学習に取り組む態度を考察し、捉えなおした。端的にまとめると「予測困難な社会」を生き抜いていくために、「課題の発見・新たな価値の創造」と「自己調整」が必要である、とまとめることができた。以下がその考察である。

平成 29 年学習指導要領の第 1 章総説において、これから我々が直面するであろう社会情勢について、「社会構造や雇用環境は大きく、また急速に変化しており、予測が困難な時代となっている。(略)一人一人が持続可能な社会の担い手として、その多様性を原動力とし、質的な豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことが期待される。」と述べられている。また、OECD の進める Education 2030 プロジェクトの中では、「不確実な中を目的に向かって進んでいくためには、生徒は好奇心や想像性、強靭さ、自己調整といった力をつけるとともに、他者のアイデアや見方、価値観を尊重したり、その価値を認めることが求められる。また、失敗や否定されることに対処したり、逆境に立ち向かって前に進んでいかなければならない。」と述べられている。双方に共通しているのは、社会の予測困難性が高まっている点に言及している事である。社会の予測が困難になることによる、「学び」の在り方の変化を描き出すために、予測が平易な社会、どのような社会になるのかの見通しが立ちやすい社会というものを仮定し、予測が困難な社会と比較して考察を行った。

まず、社会の見通しが立ちやすく、その在り様を予測することができれば、その社会で求められる価値観や、それに基づいた必要な能力を想定することも可能になるであろう。それが可能であれば、想定される必要な価値観や能力を指導者である立場の存在≡大人から子どもに伝承することが社会を生き抜いていくための能力育成の有効な手段となる。

一方で、社会の在り様の予測が難しい社会においては、どのような価値観が求められるか、またどのような能力が必要になるのかの予測をすることができない。当然、大人が考える必要な価値観、能力が子ども達の生きる社会で有効である保証はない。そうすると、子ども達が自らで、各々が属する社会で直面する課題を乗り越えていく上で必要な価値観を創造し、その価値観に基づいた能力を身に付けていく必要があると言える。つまり、予測が困難な社会

とは指導すること、すなわち指導者が進むべき方向を指し示すことが困難な社会と言い換えることができる。だからこそ、その社会を生きる子供たちの「主体性」が求められる必然性があると言える。

このように、「予測が困難な社会」を生き抜いていくためには、大人から子どもへの価値観や能力の伝承だけでは事足りず、子どもがまず自らの課題を認識し、その課題を解決していくための価値観の創造と、それに基づいた能力を習得し、発揮する必要がある。加えて、予測が困難な社会における、指導の困難さを認めるのであれば、子ども達が身に付けた能力の発揮、すなわちパフォーマンスが効果的であったのかどうかの検証や、パフォーマンスが不十分であった場合にどのように学習するかも含めて子どもが行っていく必要がある。このパフォーマンスの検証と学習、いわば振り返りにおいて重要なのが「自己調整」となる。

我々には、音声から情報を理解するのが得意な人もいれば、視覚情報からの理解が得意な人もいるなど、それぞれの認知特性を持っているとされている。こういった認知特性とまではいかなくとも、対面での講義による学習が好きな生徒もいれば、自分でパソコンを用いて動画を見て学習が好きな生徒もいるなど、生徒によって適した学習の在り方は様々である。したがって、効果的に生徒が学習を進めていくためには、生徒自身が自らの学び方の特徴やクセを認識した上で、自らの学習の方向性に応じた学び方が出来ているかを自己調整していく必要がある。

以上をまとめると、図 1 のように①課題や価値観の創造、つまり自らの学習の方向性の認識、②方向性にしがった能力の習得と活用、③方向性にしがった、パフォーマンスの振り返り、によるサイクルを生徒自身で循環させられている状態が「主体的に学習に取り組んでいる」状態と言えるのではないかという結論に至った。

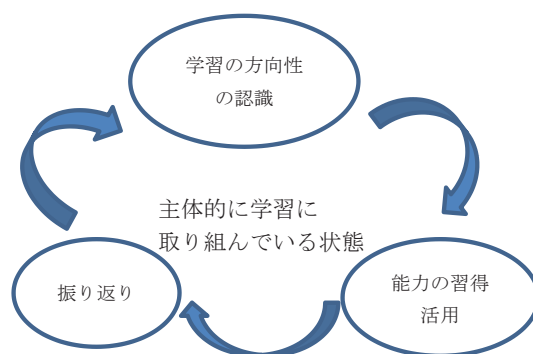


図 1：主体的な学習のサイクル

4. 外国語科 主体的に学習に取り組む態度

以上の考察から、主体的に学習に取り組む態度を①課題や価値観の創造、つまり自らの学習の方向性の認識、②方向性にしがった能力の習得と活用、③方向性にしがった、パフォーマンスの振り返り、によるサイクルが循環している状態と定義した上で、本実践をデザインした。本実践は外国語科における、話すこと[やり取り]を通じて主体的に学習に取り組む態度の育成をねらいとしたので、①自らの英語によるやりとり上の学習の方向性を自分なりに設定する、②方向性に応じた英語の知識やコミュニケーションスキルの習得と活用、③①に基づいた振り返りを通じた自分のやりとりにおける課題の発見、というサイクルが循環している状態が、本実践の目標とする状態であると考えた。

5. 実践の概要

本実践は、上に述べた①～③のサイクルの循環を目的とし、表1のような手順で行った。

表1：実践の手順

時間	内容	ねらい
1	教師による「良いやりとり」の原則の提示	①学習の方向性の認識
2	対話のプレテスト	
3	発話打ち込み	
4		
5	教師による、やりとりの展開の指導	②知識・スキルの習得と活用
6	ペアで3分間の自由即興対話	②知識・スキルの習得と活用
7		
8		
9	振り返りシートの記入	③振り返りと課題の発見
10		
11		

5.1. 学習の方向性の認識

生徒が自らの学習の方向性を設定する上で重要となるのは、「価値観の創造＝良いやりとりとはどのような特徴があるのかを理解すること」及び「課題の設定」である。本来、「価値観の創造」も子どもが自ら行うのが目指すべき「主体的に学習に取り組む態度」であるが、本実践では生徒がそれを言語化するには抽象度が高すぎると判断し、教師による提示を行った。提示した原則は二つあり、一つが「明瞭であれ」、もう一つが「ポライトであれ（魅力的であれ）」である。前者の「明瞭であれ」はGrice (1975)

が提唱した会話の協調の原則からくるものである。この原則は、自らが伝えたい内容を過不足なく、あいまいさを避け論理的に伝えることの必要性を指摘するものである。一方で、「ポライトであれ」はLakoff (1973)⁴⁾が提唱した原則である。我々の日常生活におけるやりとりにおいては、本音や本心をあまりにも分かりやすく伝えてしまうと相手の心象を悪くし、結果として伝えたい内容も伝わらなくなってしまうことがある。したがって、相手に伝わる印象が悪くならないように、時に直接的な伝え方を避け、あいまいな伝え方などを用いる必要があることを提示したものである。「ポライトであれ」という表し方だけだと、「とりあえず丁寧表現を使っておけばよい」という誤解を与えてしまう恐れがあったため、「(丁寧であることも手段としつつ)魅力的であれ」という原則として生徒に提示した。

生徒はこの「明瞭」でありつつも「魅力的」であるという二つの原則が成立しているやりとりが「良い」やりとりであるという価値観のもと、自らのやりとりにおける課題の設定に取り組んだ。その課題の設定のために行ったのが、以下のプレテストである。

「英語を用いた対話で、「いい感じ」の雰囲気を作りつつ、有効発話語数を増やすにはどうすればよいのか」という仮説の検証に取り組みます。本日プレテストとして対話を録音し、次の時間にそれを分析した上で、授業中の対話練習に各々の課題を持って取り組み、本当にいい感じで有効発話語数が増えるのか、12月にポストテストを行って検証します（ポストテストの分析は3学期に行います）。
トピック：自由
時間：ペアで1分5秒

プレテストに臨んだ生徒は、ボイスレコーダーによって録音された自らの音声を聞き、自らのPC (GIGA スクール構想によって渡されたもの) を用いて発話をすべて書き出し、有効発話（意味伝達を行っている発話）と無効発話（つなぎ言葉など、意味伝達に直接関わらない発話）に分けて語数を入力した上で、それぞれのやりとり上の課題（コミュニケーションブレイクダウンとその理由）を設定させた。表2が、あるペアが書きだしたやりとりにおける発話である。

表 2：発話の打ち込み

Group	名前	アルファベット(久松 なら H なら I)	発話数 (全体)	発話数 (有効)	発話数 (無効)	質問の回数
		N	1-N	56	41	15
		M	1-M	47	42	5
			1-合計	103	83	20
時間	発話者	発話内容				
5秒程 ↓		始めの合図				
0:06	M	Hello				
	N	あ、hello				
0:08	M	So...so.what did you do tomorrow?				
0:12	N	to,tomorrow?				
0:13	M	sorry,sorry.えー.what did you do yesterday,yesterday				
0:17	N	あ、yesterday,OK,OK、あーそーa.after school.so...I,I...え、待って、I、あ、もういいや				
0:30	N	I (笑)				
	M	(笑)				
	N	I go to home.my home.				
0:32	M	あ、OK,me too,me too				
0:33	N	ずう				
	M	And then ?				
0:34	N	And so ,I ate dinner,				
0:38	M	dinner.so...おおう.what did you eat				
0:40	N	ああー				
	M	for dinner?				
0:43	N	あーso,rice and so chickin.				
0:46	M	rice and chickin				
0:47	N	Oh,cabbage,chickin				
コミュニケーション	分析①	質問を正しくつくれなかった。				
ケーション	分析②	話題が唐突すぎる。				
プレイクダ	分析③	つながり言葉のバリエーションが少ない。				
ウンとその	分析④	詰まったときに日本語が出てしまう。				
理由	分析⑤	質問の数が少ない。				
全体の傾向	話題の数	2				
	ターンの数	5				

5.2. 知識・スキルの習得

有効発話語数を増やしていく上で、生徒の全体的な課題として「何を話していいかわからなくなる」というものがあつた。全体的に共有されている課題については一斉指導で行った方が指導効果が期待できると判断して、教師からの指導を行った。既習内容として、ペアがその日や前の日にやったことについて情報をやりとりするという練習をこの実践の前に行っていたため、自然な流れでお互いのやったことについてやりとりをするための展開の仕方を指導した。その具体としては、あいさつをした後に、天気などのお互いが共有できる情報についてのやりとりをしてから、お互いがやったことについて質問をしてやりとりを展開するように指導を行った。また、やりとりの中で言えなかった表現についてはPCを用いて翻訳サイトなどで調べるよう指導を行った。

5.3. 振り返り

振り返りについては、表3に示す振り返りシートを配布し、①プレテストの発話の書き出しを踏まえた課題設定、②その課題を踏まえて即興の自由対話の実践、③実践を経た後の自分の反省と解決策の考案、④自らの課題の再設定というサイクルで、教師

の介入はせずに行った。図2、3は41名の生徒から回収した振り返りシートから、最初に課題として挙げていたものと、最後の実践の前に課題として挙げていたものを、テキストマイニングしたものである。

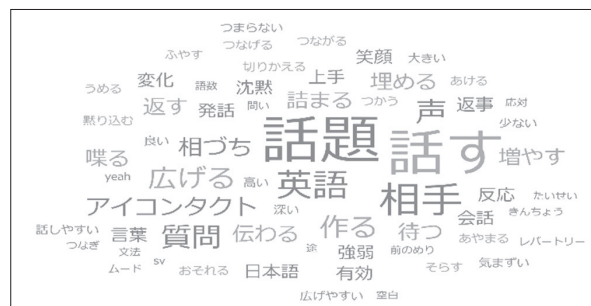


図 2：生徒が最初に設定した課題

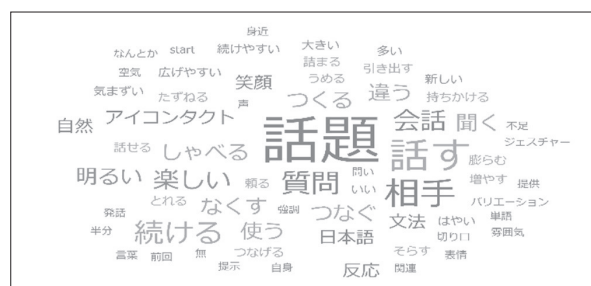


図 3：生徒が最後に設定した課題

表3：振り返りシート（生徒の例）

2021年度 中3英語 Toi Story～はじめ：Que～ 対話 振り返りシート

方向性：「いい感じ」の雰囲気を作りつつ、有効発話語数を増やすには

	日時	自分が改善したいポイント (1日2つまで)	自分の反省 (「表現を知らなかった」 以外を簡条書きで2点まで)	次回工夫したいこと 例) 質問内容を具体的にする など
最初に設定した課題	11月19日	☆ ちゃんと話題を戻らせる。 ↓ ☆ 広げやすい話題	・ 後半は勢いと質問でした。 ・ 越えた時間、朝飯、班話を聞いても話が広がらなかった。	沈黙だと相手も自分も決まったことと聞き合っ てターンで終わるので話を広げよう に自分からする。
	11月24日	☆ 余韻方向の弾丸、つぼめる 話題にも持て行きたい。 ☆ 最近のことで話題を見つける	・ 知らない表現があった。	昨日よりも「いぶ」話せた。 共通の話題を「なげたり、勉強のことと話し合っ て決まった話題以外」にした。
	11月26日	☆ 沈黙を減らす ☆ 焦って質問攻めしない	・ 知らない表現があった。	今日はテレビドラマの話をして、聞こうと思っ たんだけど、単語が難しいので、聞けることか に限りかけた。
	11月27日	☆ 自分の語彙力で 話せる話題を探る。 ☆ ぶどうと野球? 他に探る	・ 「school trip 縛り」	共通の話題だし、イベントが多かったから 聞けることがたくさんあった。
最後に設定した課題	11月30日	☆ 話を膨らませる ☆ 聞くこと、話せることの多い 話題	・ 話題はよかった。	ドラマの話をして、話しやすい話題で続けられ た。でも、単語が難しい。聞きたいことと聞ける ことがあった。

全体的な傾向としては、相手に応じた話題の選択や、適切な質問を英語で行うことを課題としていたようである。個別に見ていくと表3にあげている振り返りシートにあるように、実践を行うたびに課題として設定している点が変わったり、同じ課題でもより具体的な解決方法を考えていたりするなど、学習の在り方を自ら調整している様子などの生徒の振り返りシートからも観察することができた。このことから、①自らの英語によるやりとり上の学習の方向性を自分なりに設定する、②方向性に応じた英語の知識やコミュニケーションスキルの習得と活用、③①に基づいた振り返りを通じた自分のやりとりにおける課題の発見、というサイクルを循環させられていたという点において、主体的に学習に取り組む態度の育成に寄与できたのではないと思う。

6. 実践の振り返り

以下が主体的に学習に取り組む態度の育成に向けた実践の振り返りである。を行った所以である。一つ目は、教師の指導観を変えていく必要があるということである。二つ目は、教科固有の学力と汎用的な学力のダブルバインドをいかに解決していくかという課題である。

6.1. 指導観の変容

従来の指導観においては次の図4に示すように「良いコミュニケーション」を各領域の知見に基づきながら教師が下位要素へと分析を行い、それらを容易なものから難易度が高いものなど、生徒が学習しやすいであろう順番に整理、すなわちカリキュラム化を行った上で、生徒はその整理にしたがって学習を行いながら、教師の指導に「ついていく」こととなる。そして、教師は生徒の学習状況を評価しながら、生徒が自らの指導についてきているかを見取り、生徒に課題が見られれば、その課題を解決するための要素を分析し、その分析にしたがってまた生徒は教師の指導に「ついていく」こととなる。この、分析、整理、指導（学習）というサイクルが「秩序」立っており、それを教師が「スムーズ」に回し、教師に生徒がついてくることが出来ている指導を「良い指導」として捉えてきた。

一方で、学習調整を伴う主体的な学習ではどうか。従来の指導との違いを端的に述べれば、教師が行ってきた下位要素への分析、整理というカリキュラム化自体を生徒に行わせるという点であると感じた。図5はあくまでその一例だが、教師から提示された「良いコミュニケーション」を出発点として、実践を通じて自ら課題を見つけていく。その見つける課題は教師がやるようにきれいに秩序立ってはいないであろう。しかし、課題を解決していく中で、なん

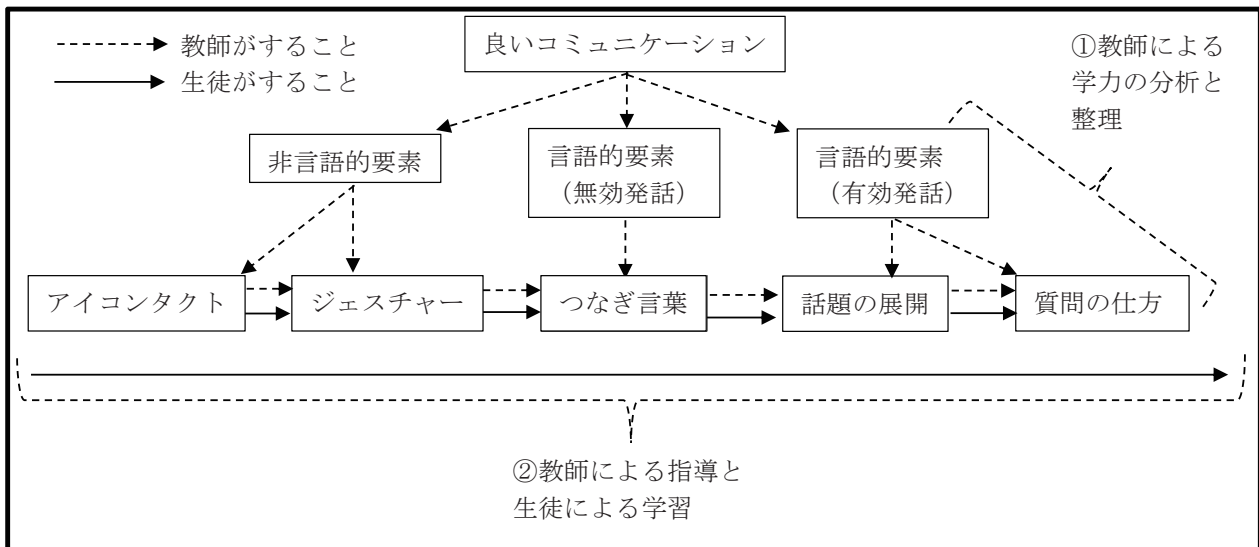


図4：従来の指導（学習）の構造

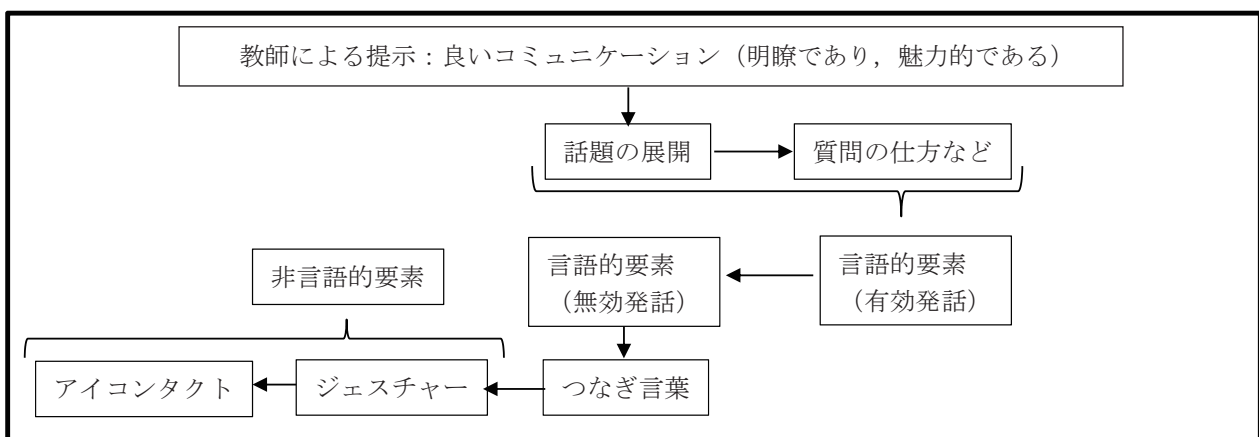


図5：本実践における主体的な学習の構造の一例（生徒によって分析・整理の仕方は異なる）

となく「良いコミュニケーション」の要素が見えてくる。しかし、それだけでは不十分であることに気が付き別の項目へと取り組む，というように，専門家からすると「不恰好」で「無秩序」にも見える学習プロセスをたどっていくことになる。ましてやそれが一つの教室の中に生徒の数だけその学習プロセスが生まれるのである。ある意味その混沌とした状況を是とする指導観が主体的に学習に取り組む態度の育成には必要なのではないかと感じた。

6.2. 教科固有 vs 汎用

今回の実践は「主体的に学習に取り組む態度」の育成を目的とし，その中でも「生徒が自らの学習調整を行っているかどうか」という観点でその実践を振り返った。一方で，「良好な雰囲気構築しつつ，有効発話語数を増やす」という英語という教科における学習目標も「主体的に学習に取り組む態度の育

成」の手段としてではあるが設定されていた。この有効発話語数については現在集計中であるが，汎用的な学力の育成を目指した授業（学習）における教科固有の学力の育成についてどう振り返るべきなのだろうか。以下の表が示すように，①と④については実践の振り返りが容易であるが，②と③，つまりどちらかは効果があったが，どちらかには効果がなかった，という場合の振り返りは今後の検討が必要であると言える。

表4：実践の効果の場合分け

		○：学習効果あり ×：学習効果なし			
		①	②	③	④
固有		○	○	×	×
汎用		○	×	○	×

7. まとめ

「主体的に学習に取り組む態度の育成」を目指して実践を行った。著者なりに概念整理や指導手順など、体系立てて実践に取り組もうとしたものの、実践後の感想としては「混沌」というのが正直なところである。先述したようにそもそも、学習の方向性とその評価規準となる価値の創造を（出来る限り）生徒に委ねているので当然と言えば当然なのだが、生徒の活動の様子やパフォーマンスに対する「良い」、「悪い」の判断であったり、生徒の活動の統制であったりが非常にしにくかった（その発想＝指導観を変える必要がある、というのが先述の内容であるのだが）。そして、その実践を報告するにあたって、学習のサイクルのどこに切り口を求めて報告すればよいのか彷徨った末に、このまとめを書いている。実践者として、また報告者として無責任ではないかという自責の念に駆られながらも、予測困難な社会を生きる学力の育成を目指して「これが正解である」と言い切ってしまう方が不自然なのかもしれない。そう考えればこのはっきりと「よし悪し」を言い切れないことから感じる無責任さに悶える自らの在り方の方がむしろ自然であるような気もしている。事実、この実践において著者の戸惑いなど気にも留めず、生徒は非常にのびのびと自分たちのペー

スで学習していた。すっきりとしない報告になったことをお詫びしつつ、この実践及び報告を通じてどのような示唆を見出すのか、ここでもある種の無責任さに悶えつつ、読者に委ねて本稿の締めくくりとしたい。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省,『中学校学習指導要領解説外国語編』, 2017.
- 2) 文部科学省国立教育政策研究所教育課程研究センター,『「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料』, 2020.
- 3) Grice,H.P, “Logic and conversation” , P.Cole & J.K.Morgan, *Syntax and semantics,3 : Speech acts*, New York : Academic Press, 1975, pp.41-58.
- 4) Lakoff,R. “The logic of politeness; or,minding your p’s and q’s”, *Papers from the ninth regional meeting of the Chicago Linguistic Society*, Chicago : Chicago Linguistic Society, 1973, pp.295-305.
- 5) OECD,「教育とスキルの未来 : Education 2030【仮訳(案)】」,2018年, https://www.oecd.org/education/2030-project/about/documents/OECD-Education-2030-Position-Paper_Japanese.pdf (閲覧日 :2022年1月4日)

A Teaching Practice in Free Improvised Conversation to Cultivate Autonomy

Narichika HISAMATSU

Abstract:

In the Course of Study, revised in 2019, the concept of scholastic ability was changed. It was organized by three elements: knowledge and skills, the ability to think, judge, and express themselves, and autonomy. The author carried out a practice to develop the students' autonomy by developing their skills for free improvised conversation in English. The importance of changing the recognition of “what teaching is” was highlighted through this practice.

